

大雪の夜の図書館で、寒さで発情したカント  
ボーイの雪鳥獣人が体格差40cmの大型猫獣人  
に処女まんこを開拓される話

体  
験  
版

第1話

大雪の図書館と、  
雪鳥の発情

大雪警報が出て、夜の大学中央図書館は完全に閉じ込められていた。

暖房まで凍りついて止まった、氷点下の館内。シマエナガの獣人で、図書館の学生係長を務める大学生のマシロは、いちばん奥の書架の影で、ガタガタと激しく身を震わせていた。

（……っ、寒いっ……でも、お腹のなかで、熱い……っ）

シマエナガは、強い寒さに襲われると身体の中で勝手に熱を作って耐える。命を守るための機能だ。

しかしマシロは、男なのにちんぽが一切なく、股間に女の穴と子宮だけを持って生まれた——カントボーイの体質だった。

普段は薬で抑え込んでいる発情が、今夜の極寒で歯止めを失い、まだ誰にも開かれたことのない処女まんこを真っ赤に充血させ、ぽっかりと口を開けたそこから、とろりと甘い愛液をドバドバと垂れ流させていた。

「——おや、係長さん。こんな暗がりで、ずいぶん淫らな匂いをさせていますね？」

「ひっ!？」

暗闇の中から、足音ひとつ立てずに「巨大な影」が落ちてきた。

振り返る間もなく、マシロの華奢な背中に、火傷しそうなほど熱く分厚い毛皮がピタリと張り付く。

文学部三年、大学一の有名人——大型猫の獣人ノア。身長百九十五センチを超える規格外の体躯が、百五十五センチしかな

いマシロの身体を、背後から檻のように包み込んだ。闇の中で  
ギリリと光る金色の瞳が、マシロの首筋を見下ろしている。

「の、ノア先輩……っ。近づかないで、ください……俺は、見  
回りを……っ」

「見回り？　嘘をつく口ですね。……猫の鼻と夜目を甘く見な  
いでくださいよ。お前が寒さに耐えかねて、股間から発情した  
メスの甘ったるいまん汁を垂れ流していることくらい、入り口  
からでも分かりましたよ」

「——ッ！？」

いちばん知られたくないことをあっさり言い当てられ、マシロの全身から血の気が引いた。

逃げなければ。鳥としての警戒心が警鐘を鳴らす、ノアの圧倒的な体格差の前では、指一本動かすことすら許されない。

ビリッ！！

「あゝッ！？」

ノアの巨大な手が、マシロの制服のズボンを布地ごと無慈悲に引き裂いた。

氷点下の空気に、これまで誰にも見せたことのない、愛液でぐしょぐしょにぬれそぼったピンク色の処女まんこが剥き出しにされる。寒さをしのぐために、マシロの真っ白な羽毛が防衛本能でポンツ！と限界まで丸く膨れ上がっていた。

「素晴らしい……。雪の妖精と呼ばれるシマエナガのまんこは、こんなに卑しい形をしているんですね。寒くてガタガタ震

えているのに、クリトリスだけはパンパンに勃ち上がって、熱い汁を吐き出している。……最高にエロい」

「や、やだあつ！ 見ないでっ、寒いつ、見ないでえっ！」

マシロは泣きながら両手で顔を覆ったが、ノアの極太の指先が、容赦なくそのドロドロの割れ目をつウツと縦に強くなぞり上げた。

「ひゃあアアアッ?!?!?♡♡♡」

マシロの口から、図書館の静けさを切り裂く甲高い悲鳴が弾け飛んだ。

外気で冷え切った過敏な粘膜に、ノアの分厚く熱い指の腹がダイレクトに突き刺さる。冷えと、雄の指の質量の差が、マシロの神経を直接殴りつけた。

「口では嫌がりながら、私の指が触れた瞬間、子宮の入り口がビクンツと跳ねて愛液をすり付けてきましたよ。本当は、凍え

死にそんな身体を、私の体温で温めてほしかったんじゃないですか？」

「ちがっ♡ 違うのっ♡ おれっ、そんな、汚い身体じゃ……んひいッ！♡」

グチュッ♡ズリユッ♡

ノアの大きな指が、皮から顔を出してヒクヒクと震えるクリトリスを、指の腹でぐにゅっ♡と重く押しつぶした。

「んぎいいいいいいッ?!?!♡♡♡♡」

「私の巨大な指で、その小さなクリちんぽが完全に隠れてしまいましたね。このまま根元からすりつぶされるのと、寒さで凍え死ぬの、どちらがお好みですか？」

クニクニツ♡ズジュウウツ！♡ギユリイツ！！♡

「あゝあゝあゝッ！♡痛っ、重いっ、大きな指でっ、クリちやん潰されてっ、あゝアアッ！♡」

マシロの華奢な骨盤には到底処理しきれない、巨大な雄の指による極限の質量責め。

逃げようと短い足をばたつかせるが、ノアの巨体に完全に押さえつけられ、むしろ自分からノアの手のひらへ股間をこすりつける形になってしまう。

「おや、もがけばもがくほど、私の指にクリトリスが深く食い込んでいますよ。……ほら、ナカもこんなに熱く口を開けて、私を誘っているじゃないですか」

ズチュウウウツ！♡

クリトリスを重く押しつぶしたまま、ノアのもう片方の指が、甘い匂いがするまん汁の海をかき分け、狭く閉じたまんこの入り口の奥へとズドンッ♡と無慈悲に突き入れられた。

「おッ……ほオッ?!?!♡♡」

「すげエ締め付けだ。大人の男の指すら入ったことのない処女肉が、私の太い指を食いちぎる勢いで吸い付いてきやがる。……お前の小さな内臓、私の指一本で形が変わっているの  
が分かりますか？」

「んあゝあゝあゝッ！♡♡ むりっ、だめっ、お腹っ、指が太すぎてっ、ナカが押し広げられてっ、あゝあゝあゝあゝ

ッ！！♡♡」

ズチュンッ！♡ ズチュンッ！♡ ギシィッ！♡ ギシィ

ッ！♡

マシロの視界が、明滅するように激しく弾けた。

寒さと孤独への恐怖で凍りついていた身体が、ノアの指がお腹側の感じる肉壁をえぐり上げるたびに、爆発的な快感の熱で

内側からドロドロに溶かされていく。

「イクっ！？♡ ノア先輩っ、おれっ、図書館でっ、おっきな

猫の指にめちゃくちやにされてっ、イっちゃううッ！♡♡」

「ええ、存分にいき狂いなさい。お前のその真っ白な羽毛を、

自分の淫らな潮でドロドロに汚してみせろ」

ギユリギユリギユリッ！！♡♡

「ピイイイイイイイイイイイイッ！？！？♡♡♡♡♡」

プシャアアアアアッ！！♡♡

マシロは呼吸を完全に止め、羽毛を極限まで逆立たせたまま硬直した。そして、処女まんこからすさまじい勢いで、大量の熱い潮を噴水のように噴き出した。

甘い匂いを含んだ潮が、ノアの巨大な手と、図書館の冷たい床をドロドロにぬらしていく。

「……ハアッ。すげエ潮だ。冷え切った図書館が、一瞬でお前の発情の匂いで満たされましたよ」

絶頂の余韻で白目を剥き、よだれを垂らしながらノアの胸に  
だらんと寄りかかるマシロ。

「はひっ……はあっ……あ、あう……っ♡ のあ、せんぱ  
い……っ、あったかい……っ♡ もっと、熱いの、ちょうだ  
い……っ♡」

警戒心も学生係長としてのプライドも完全にへし折られ、マ  
シロは身体の芯に染みついた本能のままに、ノアの首にすがり  
ついた。

その淫らで惨めな姿を見下ろし、ノアは残酷に、そして酷く甘く嘲笑う。

「ああ、いいですよ。……ですが、猫の遊びはまだ始まったばかりです。次は、私が少し離れて……お前がどれだけ私の体温なしでは生きられないか、たっぷり焦らして差し上げましょう」

凍えきった図書館の最奥で、雪の妖精が完全に快楽の奴隷へと堕ちていく、甘く残酷な夜が幕を開けた――。

# 体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。